

## 西鶴晩年の俳諧と浮世草子

### 水谷隆之

貞享二年頃より京を中心に急速に広まった、おだやかな連歌風・有心正風体のいわゆる元禄俳諧は、無心所着体を特徴とした宗因風の俳諧、またそれまでの西鶴の俳諧とは対照的なものであった。そして西鶴はこの時期、「此ごろの俳諧の風勢、氣に入不申候ゆへ、やめ申候」(貞享五年ないし元禄二年三月、真野長澄宛書簡)と自ら言うように、俳諧に對して距離をおいていたようであるが、その後俳壇に復帰したことはこれまでに指摘されている<sup>(1)</sup>。本稿では、元禄當時の西鶴の俳諧観について改めて検討し、西鶴晩年の俳諧と浮世草子の関係について考えてみたい。

#### 一

西鶴の、とりわけ最晩年の連句作法や俳諧観を知りうる

好個の資料に、「西鶴独吟百韻自註絵巻」(元禄五年成か、以下「自註絵巻」と略す)<sup>(2)</sup>がある。本絵巻には元禄俳諧を意識した句が散見し、とくに各句に施された自注は、当流俳諧に對する西鶴の配慮のありようをうかがうために貴重である。本絵巻には加藤定彦氏の解説と詳細な注が備わっている<sup>(3)</sup>。まずは加藤氏の研究をふまえつつ、発句から第三までの西鶴自注について見ておきたい。

- 1 日本道に山路つもれば千代の菊
- 2 鸚鵡も月に馴て人まね
- 3 役者笠秋の夕に見つくして

(数字は「自註絵巻」百韻の句番号、以下同)

発句の自注では、「俳諧、当流といへるは、中古のごとく言葉をかざらず、心行の付かたを本として」と言い、元禄

俳諧が以前の貞門俳諧とはちがひ、固定的な付合の語によらない（心行）の付け方を基本とすることを示す。そして、脇句においては、「何の事もなく付寄けるを皆人好める世の風義に成ぬ」と言い、疎句体が中心のその俳風に同調する姿勢を見せている。しかしながら、第三句では、「中々、近年新しき事は作り物とて一時花にして、見なれたる孔雀、穴熊の力業を幾度も慰みにおかしがりける。俳諧も此心に、むかしから付きたりたる事どもに極めて、梅に鶯、松に雪、正風体ぞよし」と言い、昔からの正風体の付合が良いとも主張する。従来指摘されているように、この箇所は、『西鶴名残の友』（元禄十二年刊、成立は元禄四、五年頃か）巻四の三「見立て物は天狗の媒鳥」の、「此かしこき世なれば、中々作りものなどを請とる事にはあらず。古流なれども孔雀か、中古なれども力持、すこしも手ぬきのない物を人も好事なり」という記述に重なっており、元禄当時においてもなお伝統的な付合語を重視する西鶴の姿勢がここにもみとれよう。

以上のように、西鶴は、発句および脇句においては（心付）による疎句体中心の元禄俳諧に同調する向きを示しながらも、第三句においては伝統的な付合語の使用を推奨するというように、付合のありようをめぐり一見異なる主張

を述べている。こうした例は『自註絵巻』に散見し、ここに西鶴俳諧の、元禄当流俳諧との根本的な撞着のさまを指摘できなくもない。しかしながら、本絵巻の句からは、当流俳諧を前にして逆に宗因風の発展的継承を企てる西鶴の意図を読み取ることもできる。既に多くの研究が重ねられてきてはいるものの、論を進めるにあたり、西鶴の当時の俳諧観についてまず確認しておきたい。

西鶴が当時ことさら問題にしているのが、（俳言）の扱いについてである。

『俳諧のならひ事』（元禄二年十一月成）「俳諧付はだの事」むかしは前句にひとつものかぬやうに付る事を第一にいたせり。近年はまたあまり遠く付て其正体をわすれ侍る。此行方ともよろしからず。兎角中をとりて正風の俳諧とはいへり。（中略）其一句、俳言つよく然もやすらかにして、跡又難句とおもはぬ句作にいたす事、此道の巧者といへり。（中略）第一俳諧に俳言のうすきを嫌ふ事也。

乾裕幸氏は、ここで西鶴が問題とする「俳言のうすき」状態とは、「現実化、通俗化機能の脆弱な《俳言》、言いかえると、その抱き込んでいる現実のコンテクストがみすばらしい《俳言》の意」であるとしている。さらに、「《俳

言」が抱き込んでゐる現実のコンテクスト」、あるいは「付合によつて浮かび上がる所記未然のコンテクスト」自体はあきらかに散文的、浮世草子的であると、西鶴は「俳言」を「人情（世の人ごころ）」を含蓄する言語として迎えてゐて、「それがより豊かな肉体性・アクチュアリティーを求めて行き着いたのが浮世草子なので」あるとし、西鶴のいう「俳言」と浮世草子との関連性について指摘している。「俳言つよく然もやすらか」なる俳諧を推奨し、さらに「俳諧に俳言のうすきを嫌ふ事也」と繰り返し返す右傍線部に見られるように、西鶴が、連歌風で「やすらか」な当流俳諧を意識しつつ、単なる形式としてではない確かな「俳言」を用いるべきことを繰り返し強調して説いていることは注目されてよいだろう。なお、ここで西鶴のいう「やすらか」な句作りとは、『丁卯集』（二品編、貞享四年刊）に、「去年おと、しの句のふり、世上こぞりてやすらかに好みはやりぬれば、其優美ならんとするに長じて」とされるように、平淡な詞統きのうちに深みをもたせた当時流行の句風のことである。

俳言については、さらに、『西鶴名残の友』巻二の四の、以下の記述も注目される。

されば立甫の一流は、一句うつくしく、付はだをあら

ため、風流過たるはやり言葉を出さずして、門弟も此すがたを背かず、立以・定親・可玖、すえぐまでも学びて道を広めぬ。立甫は連歌をしつて句がらをやすらかに仕立られければ、俳言うとからず。此程又当流つかふまつる俳諧は、連歌しらずして、皆すいりやうの沙汰なれば、百韻に六十句は連歌の仕立といへり。是はあさましき事ぞかし。連俳のわかちなくては、何を以て俳諧と申べきや。（中略）兎角古風・当風のまん中にありとしるべし。

「当流」すなわち元禄当時の俳諧の多くが連歌と変わらないことを批判した箇所であるが、先の乾氏の指摘にあつたように、西鶴が問題としているのが「俳言」の背景にある「俗」の「コンテクスト」であるとすると、傍線部にみえる立圃への賞賛「立甫は連歌をしつて句がらをやすらかに仕立られければ、俳言うとからず」は、その裏を返せば、「句がら」を「やすらか」に仕立てること自体はよいが、当流俳諧では「俗」とは何かという認識が明確でなく、そのために「俳言」が「うとく」なつていふという批判として捉えられる。さらに、「俳言つよく然もやすらか」なる俳諧を称揚する『俳諧のならひ事』の立場をもここにふまえるなら、西鶴は当流の「やすらか」な句体そのものはむしろ

積極的に受け入れつつ、「俳言のうす」いことの弊に焦点を絞って問題としていっているといつてよいだろう。

ところで、先に掲げた『自註絵巻』発句の自注に、「俳諧当流といへるは、中古のごとく言葉をかざらず、心行の付かたを本として」とあるのをはじめとして、本絵巻には当流の付け方として、〈心行〉の語が頻出する。上野洋三氏はこの〈心行〉について、「付句を案じる際に、前句の単語から連想される別の単語を軸にして考えるのではなく、前句の意味を全体に眺めて、そこから小説の一場面を発展させるように進める付け方」と解説する。また、乾氏は、西鶴が元禄疎句俳諧を「宗因流の延長上に捉えて」いること、つまり両者は「ぬげ」《とび》を仲介者として「連続している」ことを指摘している。

このように、当時の西鶴が、「小説の一場面」を思わせるような心付ふうの付け方を当流俳諧の方法として実践し、さらに元禄疎句俳諧を「宗因流の延長上に捉えて」いたのだとすれば、西鶴は当流俳諧への妥協を余儀なくされたというよりはむしろ、積極的にならざるを得ない状況にいたったのではないかと思われる。たとえば、乾氏は、談林的〈あしらひ〉について、「あしらわれた語が句中の他の詞と論理的ないし観念的に矛盾することによって、その矛盾の原因を前

句に探らせ、アツと了解点に達せしめる仕組みに知的なおかしみを喚起させる手法」と解説しているが、付心に無縁な詞を配し、一句のなかでのそれらの矛盾撞着をもって滑稽化をはかる、そうした〈無心所着〉の俳風が中心であった延宝期においてさえ、西鶴は、〈俳言〉の文脈を主軸にして、前句との意味のつながりを重視する付合を行っている<sup>9</sup>。とするなら、談林的〈無心所着〉の詞付俳諧を否定することによって成立した元禄疎句俳諧は、西鶴が上述のようなみずからの俳言主義をより自由に展開する、ひいては俳言が備えるべき〈俗〉の文脈をより強く意識して実践する場になりえたのではないだろうか。たとえば、前述のような談林的〈あしらひ〉の行き過ぎが顕著に表れたのが延宝期の惟中の寓言俳諧、すなわち「ある事ない事とりあわせて、活法自在の句体」〔俳諧蒙求〕延宝三年刊〕という俳諧であったが、これに対し西鶴は、「寓言と偽とは異なるぞ。うそなたくみそ、つくりごとな申しそ」〔団袋〕団水編、元禄四年刊〕といい、寓言の俳諧に「うそ」「つくりごと」があつてはならないことを、この元禄期になって主張している<sup>10</sup>。また、西鶴の門人で、新風の中心である京の点者として当時活躍していた団水も、『好色破邪顕正』(貞享四年刊)や『俳諧未曾有』(元禄元年刊)に惟中の俳論を多用しな

がらも、その寓言説を修正し、西鶴に俳調を合わせていることは、既に拙稿で述べたとおりである。

元禄当流の、(心付)を基調とする疎句体じたいは、付物によりかからず(俳言)による(俗)の文脈を重視した西鶴の俳諧の方向性に必ずしも反するものではない。西鶴にとつての問題は、以下に述べるように、「やすらか」な疎句体をとることで、いっそう作者自身の裁量・作意が必要とされだした元禄俳諧において、各作者の(俗)への認識の浅さがその目により顕わに映りだし、その俳諧がいかに「偽り」「作り物」のものとして認識されだしたことにあると思われる。

## 二

『自註絵巻』第三句西鶴自注との関連で示したように、『西鶴名残の友』巻四の三「見立て物は天狗の煤鳥」の、「此かしこき世なれば、中く作りものなどを請とる事にはあらず。古流なれども孔雀か、中古なれども力持、すこしも手ぬきのない物を人も好事なり」という記述は、伝統的な付合語を重視する西鶴の姿勢を表すものであった。ところで、本話の中で右の記述は、京の俳諧師たちが「俳諧の会」で「世のおかしき事」について話しているところに、

興業師が現れ、「みなさまの「御作意」で新たな見世物を出して欲しい」と頼み、「おどけたる人」がそれに答えた話の一部として記されているのだが、「さりながらこれらもふるし」としたうえで、続けて以下のような話が記されている。

おどけた人は、「新しい見世物がほしいのなら松前最大の鼻に頭巾を被らせて囿にし、愛宕山の本物の天狗を生け捕りにすればよい」と言い、さらに続けて、以前「鼻高の数馬」という鼻の高い浪人がいて毎日石垣町の茶店浪屋に腰かけ京中の後家をなびかせていたが、後には皆それを見知って誰も見向きもしなくなった、という話をした。

そして、本話の末尾には、以上を聞いた「点者の物がたき似船・常牧・我黒・晩山その外の連中」が、「後家のをとりは新しき仕出し」といって「笑ひ捨」たと記されている。さて、ここに挙げられた「似船・常牧・我黒・晩山」は、当時、京俳壇の第一線にいた新風の点者達であるが、ここでは、この四人が、『俳諧物見車』(可休編、元禄三年九月刊)の序文に並べられ、まっさきに非難されていたことが注目される。

『物見車』は、京の俳諧師加賀田可休が、あらかじめ十一箇所の難点を含んだ自作歌仙を諸国の宗匠二十五人に送

り、その誤判を頭書で指摘し嘲笑した書であり、『名残の友』にある「天狗の囀」の話や、京中の後家を「おとした」という「鼻高の数馬」の話は、諸国の点者に自作歌仙を送りつけ、その（囀）にまんまと引っかけた点者達の誤判をあざ笑った『物見車』の作者の悪巧みを彷彿させるものである。さらに、その『物見車』の首巻序文には、「朝顔に黄あり白き有」という発句を「今時都に誰彼と名を知られたる人」に送り、その上五文字を置かせたとある。そしてそれが掲載されたのが、上述の似船以下四人の京の宗匠たちなのであった。<sup>(13)</sup>つまり、本話には『物見車』作者の悪行をからかう意図が含まれているのであり、元禄三年秋以降に執筆されたものとみて誤らないだろう。そして「点者の物がたき」とは、可休が送りつけた歌仙に点をかけるのみならず、くだんの発句に上五まで置いたという「似船・常牧・我黒・晩山」たち四人の京点者の実直さの謂いである<sup>(14)</sup>とまでは考えられる。

しかし、それとはまた別に、「物がたき」という形容には、それら京の（当流）の点者たちの俳風を揶揄する意図が込められているとも思われる。<sup>(15)</sup>『物見車』では西鶴の批点も論難の対象とされたため、翌元禄四年八月刊『俳諧石車』を著して西鶴みずから徹底的な論駁を行っているのだが、こ

の「石車」のなかで西鶴は次のように記している。

（6草の舞台の衣装かるなる）

7待受し祭のけふをうち時雨

（数字は「物見車」歌仙の句番号、以下同）

此句、前の芝居の付寄、天地開闢此かた祭は土埃の立事也。せめて句作りもあるに、俳諧の風情にてまぎらかし、此打時雨偽のある世になを偽り者也。何と見合てもしぐれは爰に出物ぞかし。是によつて判者大かた捨点を掛られしと見えたり（中略）何れ旅しばゐに祭など、今時付合うるたへたる神もあそばさぬ事ぞかし。

（「石車」）

西鶴は、「祭」に「時雨」を持ち出すような付合は、人の関心をひくことを目的に持ち出されたまさに「出物」であつて、「俳諧の風情にてまぎらかし、此打時雨は偽のある世になを偽り者也」と批判する。「俳諧の風情」を調えるためだけの意匠や工夫、すなわちつくられた「偽り」の作爲は、前述したように西鶴が最も忌避したものであり、ゆえにことうした「偽り」「作り物」の句への他の点者の掛点は、西鶴にとつては意味のない、まさに「捨点」でしかない。また、右引用箇所が続けて西鶴は、この句の批点に違いがある「難波の点者」について「兎角在郷口は塩辛し」と一旦は非

難したうえで、しかし「京衆も歴々こそ雁も生鯛も喰し  
らるべけれ、京も京の人による也」と記し、京点者を揶揄  
している。事実、当句に対して西鶴は「一句古流なる仕立  
に存候」という批言を記し無点としていたが、京の点者た  
ちはいずれもこの句に長点もしくは平点を掛けていた。ま  
た、西鶴は、可休から送られた歌仙に点をかけてその総評  
をするなかで、「心付よき所有、付かた前句にうとき所有」  
といい、心付・疎句体中心の当流の行き方を踏むこと自体  
は褒めながら、しかし「近年の板行物皆作り物なれば、其  
俳見る事も世の費也」と当代刊行の俳諧書を「作り物」と  
いつて批判している。当流の点者に対する西鶴の憤懣のあ  
りどころが知られよう。

もつとも、同じく古風な俳体であったとしても、そこに  
確かな俳意が込められている場合には、西鶴は肯定的に評  
価している。たとえば、西鶴の前句付勝句を収める『難波  
土産』（菊子編、元禄六年刊）の以下の例、

▲（稿者注、西鶴前句）浮雲事と知ながら扱

近道や欲の世わたる厚氷

当句について西鶴は、「諏訪のうみ氷のうきはしを狐のわ  
たりて後人馬のかよひけると也。一句は中古の仕立ながら、  
前句によく付申候」との褒辞を与えている。「中古の仕立」

というのは、「浮雲」から「欲の世」を連想し、さらに「わ  
たる」を「世」「厚氷」と上下に言いかけた縁語仕立ての句  
作りについて言ったものであろう。そうした「中古の仕立  
ながら」、しかし前句にうまく付いていると西鶴が評価する  
所以は、『西鶴諸国ばなし』巻三の五「行末の宝舟」に、  
「人間程、物のあぶなき事を、かまはぬものなし」と前置き  
したうえで、馬方の勘内という男が人の制止を構わず「ま  
はれば遠し」と諏訪の湖の氷の上を渡るうとして波に沈ん  
だという話を載せること、さらに本話が人の〈欲〉をテー  
マとして描かれた章であることよって知られる。つまり、  
『難波土産』における右の褒辞は、危ないことだと分かっ  
てはいても〈欲〉によって行動してしまう人間の心のありさ  
まが、前句との付合のなかに形象化されている点を、評価  
したものにほかならない。

『石車』においてみられた京の点者たちへの批判は、以  
上のような俳意の本質を理解せず、「偽り」「作り物」の句  
に点をかけるような浅はかさに向けられているものと思わ  
れる。これは俳言についても同様である。同じく『物見車』  
の、

（9 狸の昼寝に枕まいらせ）

10 姉の見る鏡けなりと立覗き（物見車）歌仙

という付句に対し、京の〈当流〉の点者である言水は、「けなり」を「忍びて」と改めたうえで、「けなりの詞いやしく、忍びて立のぞくに其心あまり候」との批言を記していた。それに対し西鶴は、『石車』のなかで、この言水の批言について次のように難じている。

此句、姉の見る鏡けなりといふ言葉俳諧のはたらき也。

是にいづれも点みゆるされし所あり。(中略)言水点の脇書に、姉の見る鏡けなりといふ言葉を鏡忍びてとの直し、此一句には物がなく成て、中古の句作り惜しと沙汰し侍る。忍びての直しは正風体の仕立、けなり当世の俳体也。(『石車』)

傍線部は、言水という「忍びて」では「物がなく成」、すなわち面白みがなくなると批難し、「けなり」という俗語による俳言のつよさこそが俳意・「句がら」を支えるのだと主張したものである。なお、ここで西鶴がいう「中古の」とは、貞門風の、そしてここで用いられた「正風体」とは、正当の、あるいは連歌風の、といった意味である。

さて、言水の「忍びて」との直しは、「忍びて立のぞくに其心あまり候」と言水みずからいうように、余情・余韻を志向したものである。一方、西鶴自身は当該句に対し、「今時の娘、さかしく油断はならず」と脇書を施し、珍重点を

付けていた。西鶴がこだわったのは、「忍びて」などというもつてまわった表現ではなく、姉の見る鏡を「けなり」、すなわち「うらやましい」と思う娘の心情を直接的に指し示す卑近な俗語を用いることで、「今時の娘」の人情を、より鮮明にかつ強調して映し出すことであつたのであろう。ただし、西鶴は俗性の強い俳言の使用を必ずしも勧めているのではなく、俳意の充実そのものを目標とする。姉が鏡を見ているのを立ち覗くことが、〈性〉の意識の発露を示すものであるとすれば、それはたとえ以下に示す『好色一代女』(貞享三年刊)巻一の一に見られるように、色事に抜け目のない「いたづらもの」に通ずる性質である。

古代は、縁付の首途には親里の別れをかなしみ、泪に袖をしたしけるに、今時の娘、さかしくなりて、仲人をもどかしく身拵へ取りいそぎ、駕籠待兼、尻がるに乗移りて、悦喜鼻の先にはあらはなり。此四十年跡迄は、女子十八丸までも竹馬に乗りて門に遊び、男の子も定まつて廿五にて元服せしに、かくもまた、せはしく変る世や。我も恋のつぼみより色しる山吹の瀬々に氣を濁して、おもふまま身を持くづして、すむもよしなし。

『好色一代女』巻一の一  
とくに波傍線部では、非現実的なまでの誇張をもちいて、



対比的に当代の娘の「さかしさ」をことさらに強調・増幅している。西鶴が、『物見車』当該句には「けなり」という卑俗な（俳言）が是非とも必要であるところだわり、「今時の娘」の「さかしさ」「油断のなさ」をそこに強調していた真意がここに看取されよう。

『名残の友』巻四の三で西鶴が、『物見車』の作者をからかうのみならず、京の点者たちを「物がたき」と評することの背景には、それら（当流）の点者たちが俳意の確かな句作りを実現しえないことを揶揄する意図が見え隠れしている。すなわち、その俳諧が「偽り」「作り物」の作為的なものであったり、俳言についての本来あるべき吟味を欠いたものであるならば、そして当流の俳諧が疎句体中心の「やすらか」で「優美」な俳風であればなおさら、（当流）とは名ばかりの、連歌と変わらない堅苦しく古くさいものにしかならないのである。また、従来指摘されているように、「一句の心をひつからげて心に味ひ、其所に何にてもさもあるべき物をあんじ出し、我心にて作りて付ルなれば、定りたる付合の道具覚へて益なし」（元禄二年刊『誹諧番匠童』）という元禄疎句体の俳諧は、定まった古来の付物を排除する反面、作者が自らの主體的な判断によって自由に新しい付物を創作するという側面があった。『名残の友』で西鶴が、

伝統的な付合語を重視する姿勢を示したうえで、新しい見せ物の趣向についての話を反語的に展開し、京の点者たちを「物がたし」ひいては古くさいと揶揄するのには、「世のおかしき事」についての当流俳諧師の「御作意」の凡庸さ、陳腐さをいう、西鶴一流の皮肉さえもが同時に込められているようにも思われる。

### 三

では、元禄当時の西鶴の句作りとは実際どのようなものだったのだろうか。以下、『自註絵巻』にみえる西鶴句のいくつかを例に考えてみたい。

（55師恩する枕に替る薬鍋）

56願ひに秋の氷取行

長病の人、かならず食物に時ならぬを好む事也。唐土の親仁も雪中の竹の子このまれし。是、八十の三つ子のごとし。前句、病人も口中のねつにして、「秋の氷もがな」といはれしを、思ひくゝに手分にして、名山・高山にたづね入、願ひをまいらせたる心行也。人、まことあれば、天、是をめぐみ給ひ、たとへば、二月の松茸にても世にないといふ事なし。（『自註絵巻』）  
自注に示されているように、当句には『二十四孝』の

「孟宗」の故事がふまえられているが、同じく「雪中の笋」を詠み込んだ西鶴の句に、『本朝二十不孝』（貞享三刊）序文との関連でよく引かれる、延宝五年五月の『俳諧大句数』（以下『大句数』）巻八のものがある。

一子寒し親孝行の袖の月

どこにあらふぞ雪の笋（『大句数』）

「一子」「親孝行」に「雪の笋」を直接付けたこの『大句数』に対して、『自註絵巻』の付句（56）は「雪の笋」の語をぬいて仕立てたもので、「秋の氷もがなといはれしを」願ひをまいらせたる心行也」と自注するように、孟宗の故事を（おもかげ）にした（疎句）付けである。「当流には古事など嫌ふ」（『自註絵巻』第六十句の西鶴自注）ゆえの配慮であろう。

また、『大句数』は右につづけて、

小芝居に虎ふす野辺や囀ふらん（『大句数』）

と付けている。付合は「笋↓虎」（『類船集』）により、さらに「ありとても幾世かは経る唐国の虎臥す野辺に身をば投げてむ」（『拾遺集』雑・恋）をきかせたもので、乾氏の解説にあるように「（虎を小芝居の見世物にするために）虎ふす野辺をそのままこつて見世物小屋にすることだろう」という意となり、一句に歌語と俗事を取り合わせた「談林一流

の誇大表現」となっている<sup>⑤</sup>。一方、『自註絵巻』では、以下のように展開する。

（56 願ひに秋の氷取行）

57 吉野昏みんさくら細工もみぢに抱もちさせ

此付かたは、前句に世にまれなる物を爰に請て、作り花にして、春を秋に見せし也。近年は物の名人細工出来て、銀魚を金魚に照し、鯉に紋所を付、両頭の亀、山の芋のうなぎになる事も、其ま、に作り物ぞかし。

（『自註絵巻』）

加藤氏の解説にあるように、「前句の「氷取行」の部分は無視して、「願ひ」と「秋」に対応、具体化した疎句付<sup>⑥</sup>」であり、これは「笋↓虎」の付合語を用い、さらに古歌をもきかせていた『大句数』の付合とは対照的である。また、「此付かたは、前句に世にまれなる物を爰に請て、作り花にして、春を秋に見せし也」と西鶴みずから言うように、前句（56）では「世にまれ」であった物が、付句（57）では「作り物」として世にまわっているという対比のなされている点が目される。つまり、『自註絵巻』では、「まこと」の心をもって探せば必ず「天」の「めぐみ」があるという認識と、「世にまれなる」ものも「細工」によって作り出すことができるという認識とを、二句間で対照させる点に作

意があるのであり、『大句數』の句が「談林一流の誇大表現」によっていたのとは行き方を異にしているのである。<sup>57)</sup>

『本朝二十不孝』（貞享三年刊）序文に西鶴は、「雪中の筍、八百屋にあり、鯉魚は魚屋の生船にあり。世に天性の外、折らずとも、夫々の家業をなし、禄を以て万物を調へ、教を尽せる人、常也」という。この序文について、堀切実氏は、『二十不孝』において作者西鶴のモチーフとなっていたのは、「孝」とか「不孝」、あるいは「善」とか「不善」など、「人の心の二律背反と、そこから生ずるさまざまな行動のあらわれ方であった」ことを指摘し、『本朝二十不孝』序文は「創作意識」を示すものというよりは、「創作手法」そのものを示すものであると説いている。<sup>58)</sup>同様に、『自註絵巻』においても、故事を背景とした、人のいわば（実）に近い行為を示す前句と、当代の人々のさかしい行為を映した付句とが、それぞれうまく照応し、この付合を成立させている。そしてこの場合、西鶴にとつてそれらはいずれも、現実の人心に同時に内在するものとして意識されていることは押さえておく必要がある。「雪の筍」が現実にあるなしにかかわらず、それを探すのも、細工で作り出すのも、同じく「世の人心」なのである。

このように、現実のさまざまな人の営為、あるいは（世

の人心）を多角的に描きだすことは、西鶴の、とりわけ晩年の浮世草子に共通する主要なテーマである。以下に示す『西鶴織留』（元禄七年刊）巻四の二「命に掛の乞所」末尾に記された話も、それが顕著にあらわれた例のうちの一つである（引用にあたっては、稿者により任意に段落を分けた）。

I a 死ざまにかんびやうおろかにいたさぬは、あとしきの望みゆへなり。親でも子でも欲に極る世の中なれば、死跡に金銀を残すべし。是を死光りといふ。b 死別る、中にも親より妻はかなしく、妻よりは又子は各別にながらへては居られざる程におもふ物なりしが、c ふたりも三人も死せて後は、心鬼のごとく成て、中くなげきもうすく、人の愁も心にか、らず、火宅の門を横に車と出ける。d さる程に、子のわづらふ程世に物うき事はなし。人くもたねばしらぬなり。

II a 有人五十過て、たま／＼男子をもふけしに、然も生つき百人にすぐれ、是を見る程の人、「か、る貧家にてぞだつる子にはあらず」といふ。はや三歳にて、習はずして花鳥風月の大文字書ば、大師の二たびと、是をおろかにせざりしに、b 其春より虫を発して、幾葉かあたへけれども更に甲斐なく、けふをかざりと目を

見つめ、とやかにげく所へ、年中買ぬる、「此中の銀子を、今済してくだされい」と、せはしく使を立る。亭主腹立して、「此なかへ、どんな」といふて、帰へしける。此使又来て、「そなたの子が死ば銀取まいと、約束はせぬ」とわめくうちに、此子おち入れれば、皆々泣出す中に、亭主は彼米屋をさしころして置、我も果ける。

身内の者の病や死に際する（人心）について述べたものであるが、一読して分かるように、I a から I d への西鶴の主張は、二転三転している。I a は、親子の関係も結局は金欲に終始することをいう。しかし、続く b では、身内の者との死別の辛さをいい、a とは全く異なる人心を述べらる。c では子を二人も三人も死なせたのちには嘆きも薄くなるとして b を反転させ、さらに d では子供が思うほど悲しいものはないとまた翻る。a ↓ b ↓ c ↓ d は、身内の者の死にまつわる人心について、相反する二つの現実的な側

『西鶴独吟百韻自註絵巻』

(13夏の夜の月に琴引く鬼の沙汰)  
14宮古の絵馬きのふ見残す

面を、文脈の整合性に関係なく羅列したものと云ってよく、作者の主張が一体どこにあるのか読み取りづらい文章になっている。しかしそれらは、II a の親の、やや誇張を交えた子煩悩ぶりを經由して、II b の、「欲の世」を生きる掛乞いと「子に迷う親」である亭主とのやりとりの背景に溶けこんでいる。ここでは多分に誇張を交えた極端な描写がなされてはいるものの、しかしこの行文に違和感がないのは、I で示された（世の人心）についての確かな現実認識があるからであろう。「亭主は彼米屋をさしころして置、我も果ける」というすさまじい結末が成り立つのも、そうした効果にほかならない。

さて、『自註絵巻』に西鶴の浮世草子と共通する趣向・素材・用字等が多くみられることは既に指摘があるが、じつは『自註絵巻』14句から22句も、右に示した『西鶴織留』巻四の二全体の構成・発想と近似するものである。両者の対応箇所を以下に示す。

『西鶴織留』四の二

世間に絵馬医者といふ事、子細をたづねけるに（中略）又祇園のやしろに、火ともしの大男、雨の夜麦わらの笠着て

見わたせば祇園に平忠盛にとらへられし火ともしの大男お  
そろし(以下略)

15 心持医者にも問はず髪剃て(自注略)

16 高野へあげる銀は先待て

万事は是までと病中に覚悟して、日比したしきかたへそれ  
くくの形見分、程なふ分別替りて皆我物になしける、是世  
の常なり。いづれか欲といふ事捨がたし。ありがたき長老  
顔にも爰ははなれず。いはんや民百姓の心入あさまし。

17 大晦日其暁に成にけり

商人の渡世いそがわしく、町人の家くは天秤十露盤の音  
高く、大帳に付込一年中の算用つめとてかしがまし。殊更  
夜の明る迄かけまはる事あり(以下略)

18 姫に四つ身の似よふ染衣

人の親の子に迷はざるはなし。それくそれ程の正月小袖  
を好みてことしまでは它つ身なりしが、はや四つ身仕立に  
して大年の夜きせそめて春を見る心の嬉しく、はやり我と  
帯をせし事、年が楽ぞかし。

19 茶を運ぶ人形の車はたらきて

是は前の少女をからくり人形に付なしける(以下略)

20 御座敷鞠しばし色なき

かよふを、化物といひふらさせしを、平忠盛くみとめ給ふ  
ありさま(以下略)

世の人の付合、日比のよしみは病中の時しる、といへり  
(中略) 身をわけたる親子の中さへ、かんびやうにあぐみて、  
たがひにあいそをつかし、さもしき心の見へすきける。(中  
略) 死さまにかんびやうおろかにいたさぬは、あとしきの  
望みゆへなり。親でも子でも欲に極る世の中なれば、死跡  
に金銀を残すべし。

年中買ぬる、此中の銀子を今済してくだされいと、せはし  
く使を立る。亭主腹立して、此なかへどんなどいふて帰へ  
しける。

さる程に、子のわづらふ程世に物うき事はなし。(中略) 有  
人五十過て、たまく男子をもふけしに、然も生つき百人  
にすぐれ、是を見る程の人、かゝる貧家にてぞだつる子に  
はあらずといふ。はや三歳にて、習はずして花鳥風月の大  
文字書ば、大師の二たびと、是をおろかにせざりしに、

(対応箇所なし)

(前略)しばし座敷の鞠をもやめて其細工の様子など見し  
行に付よせ侍る。百韻ともつゞけたる俳諧には、行かた句  
作り迎、かるうつかふまつる事有。

21春の花皆春の風春の雨(自注略) \*花の定座  
22朽木の柳生死見付る

されば人間の生死もおもへば風にのがれぬ美花のごとし。  
目前にすがたをちらす事、人又朽木の青柳すこしの水の勢  
今にもおれなば息の絶るに同じ。(以下略)

以上の類似要素をまとめると、およそ次のようになる  
(数字は『自註絵巻』の句番号)。

「火ともしの大男の絵馬」(14) ↓ 「医者・病人」(15)  
↓ 「病および人の欲心・金」(16) ↓ 「掛乞」(17) ↓  
「子に迷う親」(18・19) ↓ 「死」(21・22)

右にみられるように、『自註絵巻』第14句から22句への展  
開は、『西鶴織留』四の二の構成あるいは発想に近似する。  
『西鶴織留』卷三以降は、もと「世の人心」と題して執筆さ  
れていた西鶴遺稿であり、本章と『自註絵巻』との類似性  
は、西鶴の〈世の人心〉への関心と、俳諧付合の発想との  
関係を考えるうえで示唆的である。谷脇理史氏がいうよう  
に「当世諸職風俗批判的な」随想の章段ではあるが、広嶋

其春より虫を発して、幾葉かあたへけれども更に甲斐なく、  
けふをかぎりと目を見つめ、(中略)此子おち入ければ、  
皆々泣出す中に、亭主は彼米屋をさしころして置、我も果  
ける。

進氏が「絵馬医者の話から、医者現状、患者の現況、病  
中の人間模様、子に死なれた父親へと次々と話題が転ずる」  
ものの、「それぞれに関連して「人の心」を書き留めている」  
と確認するように、本章にも西鶴の「世の人心」への関心  
は色濃く投影されている。同様に、右掲出句を含め、『自註  
絵巻』の各句において、宗因風の一大特徴であった無心所  
着の付合による荒唐無稽な滑稽が影をひそめ、世の風俗、  
世の人心への意識をさらに強めて、付合がなされているこ  
とは注目されてよいだろう。たとえば右引用句のうち、『西  
鶴織留』とは直接的な対応関係のない遺句ふうの第20句に  
ついて、西鶴が、「百韻ともつゞけたる俳諧には、行かた句  
作り迎、かるうつかふまつる事有」とわざわざ記すことは、

付合の輕妙化を意識する技法的な面のみならず、浮世草子に共通する〈俗〉への認識、ひいては「世の人心」を、句作りの背景に常時見据えていたことを逆説的に示してもいい。<sup>33)</sup>

### おわりに

元禄当流の、心付を基調とする疎句俳諧じたいは、付物によりかからず、俳言が備えるべき〈俗〉の文脈をあくまで付合の主軸にしてきた西鶴の俳諧の方向性に、必ずしも反するものではない。むしろ、西鶴にとって元禄疎句俳諧は、世の風俗や人心の種々相をさまざまな角度から切り取り、それを虚構の現実として再構成して描き出した浮世草子と同様、〈俗〉の文脈をより強く意識して実践しうる場となつてゐる。西鶴晩年の俳壇復帰が当流俳諧への妥協のもとなされたのではないことは、『自註絵巻』の浮世草子ふうの自注が、何よりもよく物語つてゐるのである。

### 【注】

(1) 西鶴のいう「此ごろの俳諧の風勢」について、野間光辰氏『刪補西鶴年譜考証』（中央公論社 昭和五八・一一）は「いわ

ゆる天和調と称する漢詩文趣味とその口調を模した作風の流行を指すものと解しようか」とし、雲英末雄氏「俳壇の動向と西鶴」（『西鶴物語』有斐閣 昭和五三・一一）も天和・貞享期の漢詩文調の俳諧を指すとする。

(2) うち、楠元六男氏「元禄俳壇と西鶴」（『講座元禄の文学第二巻』元禄文学の開花Ⅰ 西鶴と元禄の小説）勉誠社 平成四・六）は元禄元年から西鶴没年（元禄六年）までの西鶴の俳諧活動を示し、「元禄年間にはほぼ復活した」と見てゐる。

(3) 卷子本一卷。西鶴自筆、ただし挿絵は別筆か。南水・安之編『熊野がらす』（元禄七年刊）に冒頭一八句が収められ、これが初案と推定されている。加藤定彦氏「日本道にの巻（西鶴独吟百韻自註絵巻）作品解説」（『新編日本古典文学全集61 連歌集・俳諧集』小学館 平成一三・七）は、百韻および自注の成立を元禄四年頃、挿絵を含む絵巻全体の完成を元禄五年頃と推定する。なお、本稿の『西鶴独吟百韻自註絵巻』の引用は同書による。

(4) 前掲注(3)『新編日本古典文学全集61 連歌集・俳諧集』。

(5) 『西鶴における詩と散文―好色一代男の成立』（『俳諧師西鶴考証と論』前田書店 昭和五四・六所収）。

(6) 『俳文学大辞典』「心行」の項（角川書店 平成七・一〇）。

(7) 「宗因流のゆくえ―蕉風の一面」〔芭蕉と芭蕉以前〕新典社  
平成四・六所収。

(8) 「あしらひ」考〔初期俳諧の展開〕桜楓社 昭和四三・六  
所収。

(9) 乾氏「西鶴初期の俳風―『大坂独吟集』鶴永独吟百韻について」(前掲注(8))『初期俳諧の展開』所収)は、『大坂独吟集』(延宝三刊)について、西鶴は「生の現実を、俳諧付合のモチーフ」とし、それを「主軸とし、故事・古典を単なるあしらひとして多く付合を展開して」いたと指摘する。また、中嶋隆氏「西鶴『独吟一日千句』」(『西鶴と元禄文芸』若草書房 平成一五・四所収)は、『独吟一日千句』(延宝三序)は「前句・付句の意味の連係を重視する点が特徴的だった」とし、西鶴の「心付」へのこだわりを指摘している。

(10) 楠元氏(前掲注(2))は、「寓言」の大義名分のもと「奇矯な世界へと飛躍していった俳諧は、所詮は西鶴の好みに合致せず、「漢詩文調を乗り越えた元禄俳壇なればこそ西鶴復権の可能性があった」とする。

(11) 「元禄初期の団水と西鶴―『特牛』を中心に」〔国語と国文学〕  
八三・九 平成一八・九。

(12) なお、『物見車』の序者兼頭書者は方山と推断される(『刪補西鶴年譜考証』(前掲注(1))。

(13) 『物見車』序文に並べ掲載された問題の発句は以下のとおり。

末の世や権に黄あり白き有 似船

僧いかにあさがほに黄有白き有 常牧

時世かなあさがほに黄有白き有 我黒

蝕の夜の権に黄あり白き有 晩山

なお、『物見車』には、如泉は「当分は五もじ置かね申候」、言水は「権に黄なるは稀なり」と記して上五を置かなかつたとある。もつとも、団水著『特牛』(元禄三年刊)には「予、此十月の三日の夜、言水・我黒に對話の次而たづねければ、此五文字の事は勿論、下七五の句さへ聞ずと答られし。似船にはいまだあはざれ共、末の世やといふ五文字、これもしられぬにてあるべし」とあり、『物見車』の記述の真偽のほどは疑わしい。

(14) 井上敏幸氏(『新日本古典文学大系77 武道伝来記』西鶴置土産・万の文反古・西鶴名残の友)「注」岩波書店 平成元・四)も、「京俳壇の中心に居た似船以下の俳諧師を登場させ、「物がたき」と形容した裏には、天和期の漢詩文調、元禄期の景気の流行を主導したこの連中に対する、西鶴的批判が窺える」と指摘している。

(15) 「いつはりのなき世なりけり神無月誰がまことよりしぐれそめけむ」〔続後拾遺集〕卷六・定家)をふまえる。「時雨」い



つはりのなき世」(『類船集』)。

(16) 当該句は「芝居―神祭」(『類船集』)の付合。『物見車』歌仙の作者も「古来よりかく付合すことおほけれど、打こしいろいろのさはり有て、是非亡く付煩ひて如此」と自注。

(17) 「如<sup>ウカヘル</sup>三浮雲」とは不義なる者の富貴をの給へり」(『類船集』)をふまえるか。「不義にして富み且つ貴きは、我に於ては、浮雲の如し」(『論語』)による成句。

(18) なお、『難波土産』所収の西鶴の勝句およびその西鶴評に、西鶴作浮世草子と同想・類想のものが多くことは、『定本西鶴全集』第一三卷(中央公論社 昭和三四・一)、前田金五郎氏『西鶴連句注釈』(勉誠出版 平成一五・一二)等に示されている。

(19) 「物がなく成て」について『定本西鶴全集』(前掲注(18))頭注は「面白味がなくなつて」とするが、乾氏(『西鶴俳諧集』桜楓社 昭和六二・四)は、「奈と太の草体の類似から、「な」は「た」の誤刻か。「物がたくなりて」の意と考えられる」とする。

(20) 乾氏「西鶴における詩と散文」(『俳諧師西鶴』前掲注(5))もこの箇所について、西鶴は「今時の娘」の人情を掘みとろうとした」とし、「これをかりに、『俳言』による人情志向とでも呼ぶならば、それがより豊かな肉体性・アクチュアリ

ティーを求めて行き着いたのが浮世草子である」と言い、「浮世草子の俳文性」に着目している。

(21) たとえば延宝六年刊『物種集』に西鶴は「新しきとて川原もの・又男がつけ髪、松千代が柿頭中もかづき物ぞかし」と記し、新奇な俳言を用いざるべきことを説いている。なお、この箇所について乾氏「談林の中庸思想」(前掲注(8))『初期俳諧の展開』所収)は、西鶴は「俗性強烈な用語の使用そのものを戒めたのではなくて、そうした俗語だから成り立つ一元的な付合・句作を厭つただけのことであろう」と指摘している。

(22) 当句について、横船は「なま心有」、常牧は「婚心つきて」と脇書し、幼い娘の異性を慕う心、色気づいた心に注目している。また、『物見車』歌仙の頭書者(方山)は、「けなりとること葉にて、いまだ幼少娘はらからと聞分たり」と記している。

(23) 今栄蔵氏「元禄初期の俳諧の問題―談林との断続の一面」(『初期俳諧から芭蕉時代へ』笠間書院 平成一四・一〇)所収)等。

(24) 乾氏(前掲注(19))『西鶴俳諧集』)は、西鶴の「物がたし」の用例をあげ、「物がたし」は「むかし」「古流」の風体を用い」とする。

(25) 『西鶴俳諧の読み―雪中の筈をめぐって』(前掲注(5)) 『俳諧師西鶴』所収。

(26) 前掲注(3) 『新編日本古典文学全集61 連歌集・俳諧集』。

(27) ただし、乾氏(前掲注(25))は、『自註絵巻』第56句の「人、まことあれば、天、是をめぐみ給ひ、たとへば、二月の松茸にても世にないといふ事なし」について、「二十四孝」的世界をストリートに《実》と観ずる正風俳諧師西鶴の文学意識を如実に示すもの」であり、「本朝二十不孝」をくぐりぬけた現実的・合理的精神」はなく、西鶴は俳諧と散文に対して「二重の意識構造」を持っていたとする。本稿では、「二十不孝」は「二十四孝」への「批判」や「現実的・合理的精神」のみで創作されてはおらず、また、俳諧・浮世草子ともに「二十四孝」はあくまで《実》として捉えられているという観点のもと、以前の西鶴俳諧では《あしらひ》として用いられる傾向の強かった《実》が、『自註絵巻』では《実》も《人心》の一部であるという認識を強めて用いられていることに注目する。

(28) 『本朝二十不孝の創作手法』(『読みかえられる西鶴』)ペリかん

社 平成一三・三所収。

(29) 前掲注(3) 『新編日本古典文学全集』、前掲注(18) 『西鶴連句注釈』。

(30) 『西鶴織留』をめぐる二、三の問題』(『西鶴研究論攷』新典社 昭和五六・一〇所収)。

(31) 『世の人心』と『徒然草』(『西鶴探究―町人物の世界』ペリかん社 平成一六・七所収)。

(32) 楠元氏(前掲注(2))は、『自註絵巻』第19句から21句までの景気の句についても、「その背後にはしたたかで下世話な人間ドラマが嵌め込まれている」とする。しかしこれは、「風俗詩にこそ」西鶴の「俳諧の根幹がある」ことを主旨として言われたものであり、その点で本稿も氏と立場を同じくするものである。

\*注記以外の西鶴作品の引用は『定本西鶴全集』(中央公論社)による。なお、資料引用では私に句読点を施し、ルビを省略あるいは補い、旧字体の漢字は適宜現行の字体に改めた。

本稿は、平成十八年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。